

いつもあなたと共にいる

# ドン・ボスコの風

BOLLETTINO SALESIANO • GENNAIO 2010



サレジオ会副総長

ブレゴリン神父に聞く  
「ドン・ボスコの教育のこころ」

Special Interview

聖路加国際病院副院長・小児科部長

細谷亮太氏

慈愛と祈りの人

チマッティ神父

連載 第2回・フルダ号の上で、そして宮崎へ

NO. 4





## 聖フランシスコ・サレジオ

ドン・ボスコが創立した修道会は、サレジオ会と呼ばれます。この「サレジオ」という名前はそもそもどこからきたのでしょうか。

ドン・ボスコは彼の教育法の特徴の二つに「柔和さ」をあげています。九歳のときに見た夢の中にイエスと思われる人物が現われて、彼にこう言ったのです。「げんこつはいけない。柔和と愛をもってこの暴れている子どもたちの友達になるのだよ」。ドン・ボスコは厳しく怒るのではなく、柔和さによって、愛情によって子どもたちを導くことを教えられたのです。

このドン・ボスコの教育法は、もちろん、この夢に示されたように神からのインスピレーションによつて考え出されたものでしょう。しかし、人間的なモデルも実在していました。その一人が十七世紀、フランスのジュネーブ（現スイス）で司教として活躍したフランシスコ・サレジオです。サレジオこそ、「柔和」によつて人を導くことを強調した聖人でした。彼はこう書いています。「樽いっぱいの酢よりも、一さじの蜂蜜のほうがハエを多く取ることができます」。サレジオは宗教改革の影響でカトリック信者が激減した時代にあつて、彼らの心を取り戻すために、脅したり、厳しく話すのではなく、徹底した柔和さと愛情をもつて彼らに接してその心を獲得していったのです。

ドン・ボスコは二六歳で司祭になったとき次のことを決意しています。  
「聖フランシスコ・サレジオの愛徳と柔和とを模範とする」。

もともと気性の激しい性格だったことを自覚し、サレジオの並はずれた柔和さと人々の好意を得る力にあずかれるよう願ったのです。ドン・ボスコのこの強い決意は、のちに修道会を設立するとき、サレジオの名前を修道会の名に付けたことにもっともよく表れています。ドン・ボスコはこれから世界に広がっていくサレジオ家族の活動の土台に、フランシスコ・サレジオの「柔和」を置いたのです。

一月二十四日は、フランシスコ・サレジオを記念する日です。この日、サレジオ家族は聖フランシスコ・サレジオを称えて盛大なミサを捧げます。

Fr. 浦田 慎二郎



# 「ミケーレ、半分取りなさい…」と言った。

二か月前に父親を亡くしたばかりの少年、ミケーレ・ルアが、ドン・ボスコに出会ったのは八歳の時でした。当時ドン・ボスコのオラトリオ（祈りの家・ユースセンター）に参加していた同級生が、オラトリオの宝くじで当たったネクタイを見せながら「君もおいでよ」と誘ってくれたのがきっかけでした。

初めて会ったその時から、ミケーレ少年は、そばにいるだけで喜びと温かさを感じさせるドン・ボスコに、特別な魅力と尊敬を抱くようになりました。

ドン・ボスコは時折、オラトリオに集まってくる子どもたちに、小さなメダイ（キリストやマリアの像を刻んだメダル）を与えることがありました。ある時ミケーレも、その列に並んでいましたが、メダイはもう全部配られてしまっていました。するとドン・ボスコは、自分のかぶっていたビレッタ（聖職者帽）をミケーレの頭に被せ、左手を前に出し右手でそれを半分に切る仕草をしながら

こう言ったのです。  
「取りなさいミケーレ、取りなさい。二人でなんでも半分ずつ分け合うんだよ」  
いったい何をくれるというのでしょうか？

ました。  
一八五二年一〇月三日、修道服を着ることが許される着衣式を受け、神学生となったミケーレは、早い時期からドン・ボスコの右腕



この  
小さい少年  
にはドン・ボスコの言う意味が分  
かりませんでした。

その後、オラトリオに足しげく  
通うようになったミケーレは、い  
つか神父になってドン・ボスコと  
一緒に働きたいと思うようになり

としてよく働きました。

ある時ミケーレは、ドン・ボス  
コに尋ねました。

「神父さまが、メダイを配ってい  
るとき、私に不思議な仕草をな  
さった事を覚えていますか？あれ

はいったいどういう意味だったの  
ですか？」

「まだわかっていないのですね。  
私たち二人でなんでも半分ずつし  
ようということですよ。私のもの  
は全て君のものです。借金、責任、  
それから心配事もね」そう言っ  
てドン・ボスコは笑いました。

「でも、嫌なことだけではありま  
せん。最後には何よりも美しいも  
のが私たちを待っています。それ  
は天国です。」

司祭となったミケーレ・ルア神  
父は、ドン・ボスコがこの世を  
去った一八八八年から二十二年  
間、後任としてサレジオ会会の第二  
代総長を務めました。誰に対しても謙遜で、清貧を生き抜いたルア  
神父はドン・ボスコの姿そのもの  
でした。

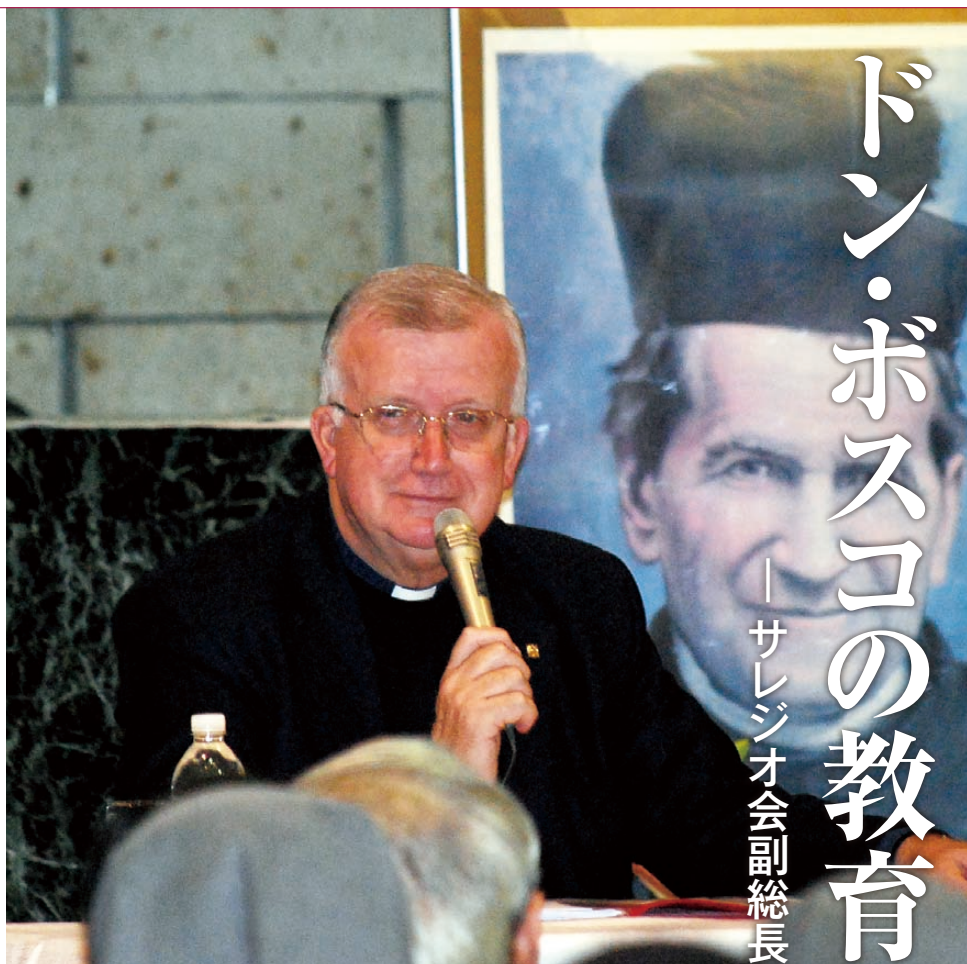
チャーベス総長は、ミケーレ・  
ルア神父の帰天一〇〇周年の今年  
を「ドン・ルアの年」と宣言しま  
した。

Fr. アキレ・ロロピアナ

サレジオ会では創立者ドン・ボスコにな  
らない、司祭会員に対して伝統的に「ドン」  
という敬称を付けることがあります。

# ドン・ボスコの教育のこころ

―サレジオ会副総長ブレゴリン神父に聞く―



## ドン・ボスコの教育：「かかわり」と「価値」

昨年十一月初旬、サレジオ会副総長のアドリアーノ・ブレゴリン神父が初めて来日し、各地のサレジオ家族と交流しました。スケジュールの合間にインタビューに応じ、サレジオの活動における心構えを、わかりやすく話して下さいました。

今回の短い滞在のなかで、私はサレジオ家族特有の精神である「親しみ」を日本の皆さんのなかにはつきりと感じとりました。これこそまさ

にドン・ボスコの教育法の柱である「かかわり」の精神そのものだと思います。現代の若者ほど寂しさや内に秘めている世代はなく、彼らは信頼できる人々の存在を求めています。夢を叶えるために信頼をもって関わってくれる大人を必要としています。この「かかわり」の精神は私たちサレジオの教育現場にみながっている宝だと思っています。

もう一つサレジオの教育現場で欠かすことのできない要素として「価値」教育があります。人として大切なものは何かと問いかけながら、若者の夢の実現を助け、自分自身を見つめる歩みを応援します。それは彼らのうちに私たちの夢を実現することではありません。それは常に彼らの「自由」を尊重し、彼らの多様性を理解してあげることです。こうして、若者は他者に信頼を置くことを学び、自ら選びとる責任と自由を育んでいけるのです。それは芸術、ス

ポーツ、文芸などに対して取り組む態度にも現れます。こうした環境と人間関係のなかで若者たちが大いに自らの能力と力を切磋琢磨しながら発揮できる場を作り上げていきたいものです。

## 大人の生き方を示そう

若者が他者への開かれた心を育むことができるよう、ともに力を合わせましょう。ここ日本では、独特の競争意識があつて、それは学校も例外ではないようです。もちろんそこには評価できる点もたくさんあります、しかし自己実現と成功があまりにも重要視されすぎるというある種の閉鎖的な状況を生み出していると言えるかもしれません。

確かに私たちは質の高い教育を若者たちに提供していると思います。しかし、教育内容だけにこだわるのではなく、あえて言うならば、一番大切になければいけないのは、大人の生き方そのものからにじみ出るメッセージだろうと思います。若者に与えることができる最高の教育は、養育者・教育者の生き方そのものだからです。





今、私たちの生きる社会は新しい次元を目指しています。それは様々な不足にあえいでいる人々との「連帯」という文化です。他者のために心身を砕き、苦しい状況に追いやられた人々と関わるからこそ、私たちが目指すべき新しい次元であると思います。日本に来て、この国が非常に発展した国であると同時に、優れた伝統・文化を保持している国であることに気づきました。勤勉さと誠実さ、そして他者への深い尊敬という、今もしっかりと息づいている特有の価値観に私はたいへん感動しました。この素晴らしい伝統文化の中で、他者に開かれた人生を築いていく、これがドン・ボスコ以来伝統の私たちの教育のありかたです。

## 本当に大切なこと

ここで、あるエジプト人の同窓生について紹介しましょう。彼は現在、イタリアの大手新聞「コリエーレ・デッラ・セーラ」の副編集長であり、かつてはイスラム教徒でした。最近、彼は自叙伝を記して、その中で自分の半生と信仰の道のりについて述べています。エジプトでのサレジオ会の学校に在学中、一度も直接的に改宗を問われたことはなかったそうです。その代わりに人間としての深い価値観を教わったと言っています。それは、真理についての価値と人生の価値であり、他者の尊厳という価値でした。そこには諸宗教の精神、対話の精神、さらにスピリチュアルな価値が含まれていました。こうして、自分自身と他者の存在について問ううちに、自ら、キリスト教徒になるのを選びとったということです。

きつとここに何か秘訣があるのではないでしょうか。その秘訣とは、「私と他者にとって本当に大切なことは何か?」という問いです。深い人間的価値は実際、キリスト教の価

値でもあります。他者を尊敬する、自然を愛する、人生を真摯に生きる。これは私たちが分かち合える価値観であり、聖書のなかでイエス・キリストが伝えていくメッセージに他ならないのです。

日本のサレジオの事業では目に見えないものを大切にすることと人間の尊厳についてきちんと教えられているようです。サレジオの事業にかかわるすべての人は力を合わせ、より多くの人に神の愛を目に見える形で伝えていくことができると思います。なぜなら、私たちにドン・ボスコの教育という神から頂いた贈り物があるのですから。

インタビュー・翻訳: Fr. 酒井 陽介

Fr. アドリアーノ・ブREGOLIN  
(ADRIANO BREGOLIN)

一九四八年イタリア、ベネツィア州生まれ。  
サレジオ修道会の副総長であり、総長チャールズ神父の第一の協力者です。

修道会の中にあつては、特に規律と修道生活について責任をもち、同時にサレジオ家族全体の担当者でもあります。そのため、全世界に広がるサレジオ家族を定期的に訪問し、兄弟的励ましをするのも大切な務めです。今回も滞在中、大阪、長崎、別府、東京でサレジオ家族との出会いの場を設けました。その合

間を縫って、京都を訪れ、日本の伝統文化に触れ、長崎では日本のキリスト教の歴史に深い関心を示しました。

日本に来る前はベルー、そして日本の一週間後にはカナダとアメリカ合衆国へと精力的に仕事をこなしています。



## Special Interview

聖路加国際病院副院長・小児科部長

# 細谷亮太氏に聞く

きき手・Fr. 関谷 義樹

心が揺れ動くっていうのは、  
生きている中で  
すごく重要なことだと思っんです。

小児科医として日々子どもたちと向き合っておられる細谷亮太先生に、特に小児ガンの子どもたちと共に重い病と闘う現場で、その経験を通して観る命、きずな、生き方について、語っていただきました。

### 細谷先生の理念

関谷 先生は仏教徒とお聞きしていますが、キリスト教についても深いご理解をお持ちですね。

細谷 私は、ルドルフ・トイスラーという医師が「病んでいる人にキリスト教の愛の力が働き、具合の悪い人がまるで蘇ったようになる。そうするための有機体としての病院であってほしい」という理念のもとに設立した聖路加病院に、もう三十八年いますし、家内がクリスチャンですから、キリスト教のことはだいぶかじっています(笑)。この理念と、マザー・テレサの「困った人のところへ行くために手足が必要なら、神様、わたしの手足をお使い下さい」というあの祈り、それからラインホルド・ニーバーの祈りが、医療に携わる者としての共通の理念を示していると思っています。

いると思っています。

関谷 ニーバーの祈りは、「主よ、変えられることは変える勇気を、変えられないことは受け入れる平静な心を、そして、その違いを見分ける知恵をお与えください。」ですね。

細谷 そう、この三つで充分ぐらいに私は思っています。キリスト教のお祈りというのは非常に分かりやすい。

医者になった動機・父親のこと・うしろめたさ

関谷 医者になったのはやはりお父様の影響でしょうか。



創立者トイスラーの碑





## 細谷

父親が開業していたのは山の小さな農村で、周りは学校にお弁当を持って来られない子や、ズック靴なんか履けなくて、ゴム靴を履いてる子がいたんですよ、中に藁なんを入れて。

そういう中で私はちゃんとスニーカーを履かせてもらった。だけどそれを履くのがちよつと後ろめたくて、そういう「後ろめたさ」が私のバックボーンになっています。よく考えると、皆が困っている時に自分だけ楽なことをするという後ろめたさというのは、もともと日本人が非常に大事にしていた感情だと思うのです。

私が小学校三年ぐらいの時、赤字とかNHKの歳末助け合いだとかの運動が流行っていて、それでクラスで決議して後ろの方に段ボール箱を置いた。したら、「自分たちが困ってる状況の中で、他の人を何とかしようなんて子どもがいること自

体とんでもない」という匿名の手紙がおやじのところに来たのを偶然覗いてしまいました。それで私は、人のために何かをするというのはものすごく大変なことで、大っぴらにやるもんじゃない、というのを後ろめたさの追体験として打ち込まれたんですね。

でも後になって、人のためになるようなことを大っぴらに出来る仕事って何かなと思った時に、父親の職業であった医者を選んでしまった、ということです。

## 小児科を選んだ理由、共感

関谷 その中でも、小児科を選んだのは？

細谷 医学部に入って、二十四歳で進路を決める時に、ホントに患者さんのそばにしよう、共感しようと考えた。だけど七十、八十の人までは思いやる自信がない。でも自分が過ごしてきた年代だったら、つらさとかそういうのはすごくわかると思うから、自分には小さい子のケアの方が向いていると考えました。

一番最初に関わった頃のお母さん

が、三十数年ぶりに私に電話をかけてきた。「うちの子が死のうとしている時にわたしたちが駆けつけたら、細谷先生がもう必死に汗だくで心肺蘇生術をしていた。その上の先生は後ろの方に立っていて、三十分ぐらい経った頃に『残念ながら駄目です』って言って部屋からいなくなった。でも細谷先生はずっと、部屋の隅に立っていた。どうしたらいいかわからない、という風にほーっとした感じで、その感じが自分たちにとって一番大きな慰めだった」と。

考えてみるとその時はもう、お父さんお母さんに対するなぐさめとか、そばにいかいようとかいうのは全くなしで、死んでいくその子どもにだけ、持つてるフーリングのすべてを共感しながら立ちすくんでいたのだと思います。

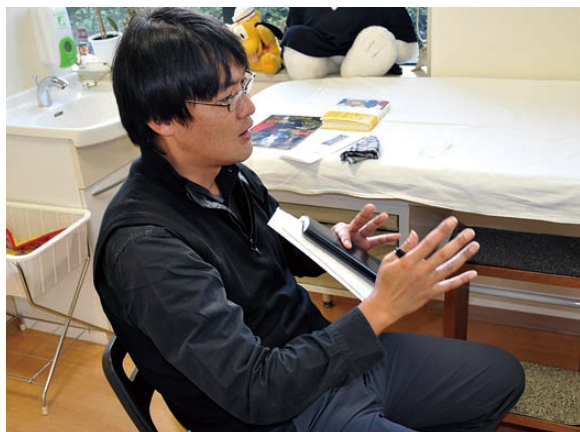
小児科を選んでホントによかったと思うのは、キャリアのスタートの時点からそういう共感をちゃんと持てたということですね。

## 歳をとっていくということ

## 細谷

子どもが持つ「死」について

のコンセプトというのは、年齢によって変わります。二、三才の頃はまあ「お昼寝してる」ぐらいの感じが、五、六歳になると「ちよつとしたお出かけ」みたいになって、十歳ぐらいになると「この人はもう帰ってこない」ということが分かるんです。でも私は父親が内科医なので、歳をとったら死んでお墓の中に入る、という感覚を普通に持ちながら育ったものですから、うちの父親は私に「お前は年寄りに冷たい。年寄りだって年寄りの春夏秋冬というものがあるんだ」ということを言っていました。





小児総合医療センター玄関

## 宗教

私はずうっとそれがわかりませんでしたね。でも、私に東京大空襲の話をしてくれたりする友達みたいなおじいさんの先生が八十歳でポコッと死んだりすると、やっぱりこれは大変なことだと、六十過ぎた頃ようやく共感を持てるようになってきました。

関谷 小児科で子どもの死を間近に見ていると、宗教というものを必ず

どこかで感じていらっしやるのではないかな、と思うのですが。

細谷 人間の力を超えたところで世界は回っていると思います。死んだ子のお母さんとかお父さん達が集まる会が、年に一、二回あるんですが、そういうときに「亡くなった子どもたちがそこに来てる」とひしひしと感じます。

## 「一緒に飯を食う」こと

関谷 このごろのように、親と子のさずなとか、つながりが薄れてきている状況の中で生きている、お父さんお母さんにメッセージをいただきたいと思います。

細谷 母親力とか子育ての力を持つてほしい。可愛いと思う以上に「この子のために何かしてあげたい」と思う親になってほしい、もっと情緒的に子どもと接してほしいと思います。

おっぱいをあげるとか一緒に飯を食うとか、一緒に生きている人間は食べ物を通じてつながっています。これはすごく重要なことだと思うのですが、今はそういう食事の時間さ

えなくなってきましたね。子ども

たちが、学校から家に帰ってガサガサと、まるでえさを与えられるように食事をさせられて、今度は塾に行く。塾で勉強して、家族はとくに食事は終わっている時間に戻ってきて、またご飯食べるかどうか知りませんが。そういう中で、ちゃんとした情緒的な家族のきずなみたいなものはなかなかできないんじゃないでしょうか。同じ釜の飯を一緒に食うということが、やっぱり家族のとても重要なつながりだと思うんです。

## やさしさのアンテナ

細谷 この病院にいる子どもたちを見てみると、小さい子どもたち同士のかきずなの深さには感心させられます。目の悪い子が足の悪い子のことをちゃんと考えて、気をつけて歩いておいてよ、ということを言うし、足の悪い子が本を読んであげるといふ時に、目の悪い子のことをちゃんと考えて、どんな本が手元にあるかをていねいに説明してあげる。人間は、他の人のことを思いやって何とかしてあげないといけないっていう



力を、ホントに小さいうちからちゃんと持っているんです。

それが思春期ぐらいになると、そういうことをするのがなにか格好悪いとか、さっきの私の助け合い運動のように、人のためにいいことをするのは難しい、と思う時期が来る。

関谷 そうですね、若い時はそういうのがありますね。

細谷 それは偽善だなどと思って、





しなくなるんですよ。小さい頃は「とげ」というか「優しさのとげ」をアンテナのように出しているのに、思春期になってそれを一回引つめると、もう一回出そうとすると、アンテナが引つ掛かって出にくくなっている。みんなそういうアンテナを倒して思春期を通りぬけようとするけれど、思春期の成層圏は通りにくいんですよ。大人になってアンテナをもう一回もとに戻そうと思っても、戻らなくなる人たちが、結構いるんですね。

**関谷** それ面白い表現ですね！

**細谷** どういう人がそのアンテナを戻すことができるかというと、「自分が今大人になったのは、一人では

れたわけじゃない」と考えることができる人だと思えますよ。だから子どもには、「おっぱいをくれたり離乳食を与えて育てる人がいなかったら、今お前はそんなに大きくなっていないんだ」ということを考えさせなければいけない。

### 感情が柔軟に揺れ動くこと

**細谷** このごろ感じることもんですが、人間、負の感情というか、憎しみとか悲しみとかね、もう一方でうれしいとか楽しいとか、そういう両方の感情が揺れ動いていないといけないと思います。心が揺れ動くっていうのは生きている中ですごく重要なことだと思っております。

ただ、人間だからどうしても、憎しみの方や悲しみの方にばかり動いてしまうことがあるわけです。そんな時にこそ、サポートしてくれる人がいないといけない。柔軟であれば、そっち側に倒れそうになっても誰かがそこでちよつとつかえ棒をしてくれば、また反対の方に揺れていくことができる。人によって感情の振幅がすごい勢いで動く人、そ

れからゆっくり動く人、色々いると思いますが、その動きに合わせて倒れないように支えてくれる人が必要ですね。

**関谷** 人間として生きるということの本質は、まさに「共感すること」「寄り添うこと」ですね。本日はお忙しい中、読者へのたくさんのメッセージをありがとうございます。

**細谷 亮太(ほそや・りょうた)**

一九四八年山形県生まれ。東北大学医学部卒業、聖路加国際病院小児科勤務。七七年から三年間テキサス大学で勤務後、聖路加国際病院に復職。現在同病院副院長・小児科部長。『いつもいいことさがし——小児科医がみた日本の子どもたちとおとなたち』(暮しの手帖社)、『川の見える病院から』、絵本『ぼくのいのち』(共に岩崎書店)、『命のノート』(講談社)など著書多数。

**関谷 義樹(せきや・よしき)**

サレジオ会司祭。一九六九年神奈川県藤沢市生まれ。岩手育ち。二〇〇三年司祭叙階。ドン・ボスコ社勤務。

### インタビューを終えて

関谷義樹

二時間以上にわたるインタビュー中、何度も細谷先生のPHSが鳴る。病院内からであろう。先生はそれに応えてテキパキと丁寧に指導なさっていた。命の現場であることがひしひしと伝わってくる。そんな中、子どもたちへのケアを通して、人間へのいとしさ、歳をとることの素晴らしさを情熱的に語ってくださった。ドン・ボスコの伝えた教育は「アシステンツァ」共にいる教育であるが、まさに細谷先生は医療の現場でそれを生きている方だなと感じた。







第二回・フルダ号の上で、そして宮崎へ

# 慈愛と祈りの人 チマツティ神父



日本へ向かう船、フルダ号がイタリアのジェノバを出航してからペリム<sup>\*</sup>、シンガポール、香港、上海を経由し、門司に到着するまでの長い長い航海を、チマツティ神父を長とする九名のサレジオ会員たちはどのように過ごしていたのでしょうか？

## 歌って 踊って

一行のひとり、カヴォリ神父はこう証言しています。

「夕方に船は出航しました。チマツティ神父は『波浪をけたてて』という聖母賛歌を元氣いっぱい歌い出し、一同もこれに唱和しました。歌が終わると、チマツティ神父は各々の手をとって『さあ踊ろう』と促し、ピエモンテ州の民謡に合わせて踊り始めました。私はそのありさまを見て、驚きもし、またあきれてしまい、『全くこの人は一行を指導できるような人ではない』と思い込んでしまいました。さて、この旅は四十五日もかかりました。師の態度にも変わりはなく、私の考えも依然として同じでした。

ああ、私は父のような、否、母のような優しい心を理解していなかった。

たのです。師は己を忘れて私どもを楽しませ、故郷を後にする者の寂しさをできるかぎり少なくするように気遣っていたのでした。後になってから次第に、その人柄を理解するようになりました。謙遜、そして言葉に尽くせないほどの慈愛、この二つの徳は、長上としての師の姿を特色づけるものです。」(「チマツティ神父の手紙1」カヴォリ神父証言より)

宣教団の団長であるチマツティ神父は、日本に行く仲間たちのことをさりげなく見ていたのです。宣教師として希望を持って出発した誰もが晴々しい顔だったことでしょう。その反面、当然のことながら不安もあり、故郷を後にする寂しさも感じていたはず。それを払拭するよう、チマツティ神父は生来の明るさと優しさをもって一行を励ましていたのです。

## 上原専禄氏との出会い

船上で初めて知り合った日本人は、後の一橋大学学長・上原専禄氏です。ちょうど彼はウィーンでの留学を終えて帰国するところでした。

<sup>\*</sup>ペリム島：紅海の南の入り口に浮かぶ火山島。1869年以降、スエズ運河を利用する船の石炭補給基地となる。1967年からイエメン領。



フルダ号船上で上原専祿氏と  
チマッティ神父(左から3人目)



歌ったり踊ったりと、にぎやかな明るい人たちが不思議でたまりませんでした。ある日、上原氏は神父に聞きました。「何をしに日本に行くのですか?」「神様を宣伝し、学校を建てたり、教会を建てたりします。」「たくさんのお金を持つているのですか?」「持っていません。神様が準備してくれるでしょう。」「日本語を

知っているのですか?」「知りません」と答えたのです。日本での大きな事業を計画していると言いながら、お金もなく、言葉も話せない彼らを見て、上原氏は驚いたに違いありません。

「では私が日本語を教えましょう。」必要な時に必要なものを与えてくださる神です。チマッティ神父は「神の御摂理」と、とても喜びました。毎日一〜二時間の日本語の学習時間で、まず挨拶の仕方を覚え、そして簡単な文字も読めるようになり、上原氏は、神父からお礼にもらったラテン語の聖書を使って、ラテン語を日本語に置き換えて言葉を教えたのです。後々大学の上原ゼミで学び、氏と同じように自身も一橋大学学長となるキリスト信者の阿部謹也氏の著書に、「上原氏はとても温厚でまじめでチャレンジ精神があり、知識も教養も豊かで心配りができる人でした。」と書いてあるとおり、彼は神戸まで行く予定を変更して、一行と共に門司港で下船し付き添ってくれたのです。初めて知り合った日本人が上原氏であったことは、やはり神の計らいでしょう。

う。彼らの友情は亡くなるまで続きました。

途中の上海で一行は、サレジオ会  
の学校に行き、久々に見る扶助者聖  
母の像に長旅の疲れもとれました。

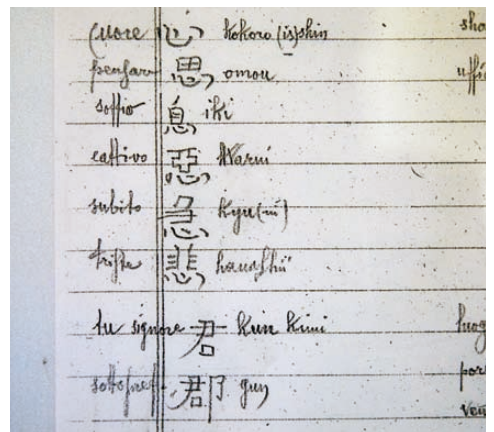
「上海では、経験ある宣教師たちは、  
私たちが日本に向かっていることを  
聞いて異口同音に、日本の布教活動  
はさまざまな面で『大変困難だ：非  
常に貧しい』と語ってくれて、何か  
につけ『すぐく、とても、大変』など  
といった最上級の形容ばかり出てき  
ました。私は(困難が多いというこ  
とで)大きな慰めを心に覚え、  
イエス様がその栄光を表すために私  
たちを日本の庭に派遣してくださる  
ということは、なんと大きな慈愛の  
しるしでしょう。」「(チマッティ神父  
の手紙)「リナルデイ神父宛」

## とうとう日本に

こうして、一行を乗せたフルダ号  
は、一九二六年二月八日の朝八時に  
門司港へ入港します。朝日に輝く緑  
の木々、雪に覆われた山々が目に飛  
び込んできました。とうとう日本に  
着いたのです。上原氏と、迎えに来

てくれた、当時すでに九州に入っ  
ていたパリミッシン修道会のマルタ  
ン神父のおかげで、なんの問題もな  
く入国の手続きを済ませ、派遣先の  
宮崎に荷物が着くまでの間、長崎に  
滞在することになりました。長崎で  
は、小神学校、マリア会の経営する  
学校、秀吉の時代に二十六人が殉教  
した丘、浦上天主堂などを非常に興  
味深く見て回りました。当時約六万  
人もの信者がいた長崎で、聖フラン  
シスコ・ザビエルと多くの宣教師た  
ちが築いたものを目の当たりにした  
一行は、感動し神に深く感謝し、こ  
れからの活動に希望を持ったのでし  
た。

さて、やっと荷物も届き、目的地



チマッティ神父自筆の漢字学習ノート





大浦天主堂前にて長崎司教とともに（1926年2月11日）

後壮年の男子が私たちに挨拶をしました。通訳を通して私は、神が勧めてくださった言葉を話しました。その後、昔からの友人であるかのように、お互いにお辞儀をして分かれました。」（二月十七日）

### 大変な日本の風習・言葉

門司港に上陸してから宮崎に到着するまで、それぞれの拠点でお世話になったパリミッシン修道会の神父の案内で、一行はすでに日本家屋への入り方や挨拶の仕方を見ていました。木造の日本家屋はイタリアの石の家と違い、とても貧しく見えただようです。家屋には靴を脱いで上がり、スリッパに履きかえ、そのスリッパも部屋の前では脱ぎます。この風習は初めての彼らにとっては大仕事でした。靴ひもを解くという作業がとても大変だったのです。挨拶にお辞儀をするということも、しかも場合によっては何度もするというのも、彼らにとっては大きな驚きでした。そして、覚えている簡単な挨拶の言葉（日本語）は言えましたが、それ以上は話せません。まだ始まったばかりです。

### チマッティ資料館館長コンプリ神父が語る、日本到着時のエピソード

門司港でフルダ号を降りたチマッティ神父はすぐに長崎に向かいました。大浦天主堂へ行き、中央に向かって右側の「信徒発見のマリア像」の小祭壇でミサを捧げたのですが、このマリア像が、なんと、夢の中でドン・ボスコを導いた「扶助者聖母マリア像」にそっくりだったんですね。杓は持つていないが冠を被り、青いマントに赤い服、幼きイエスを抱くその姿が。チマッティ神父は感動してこうおっしゃったそうです。「扶助者聖母マリア様は、私たちより先に日本にいらっしゃっていました。きっと私たちの道を準備して下さったに違いありません。」



\*キリストを敬う儀式の一つ

の宮崎に向かいます。ここでちょっとした試練がありました。グアスキノ修道士が体調を崩してしまったので、付き添いにマルジャリア神父をつけて、長崎に残すことになったのです。さらに、久留米ではお世話になった教会から、さあ出発という時に、リビアベラ神父が持病で倒れてしまいました。リビアベラ神父が後から来られるように手配して出発し、二月十六日午前十一時頃、漸く宮崎に到着しました。

「教会に着きました。そこはまるで

夢を見ているようでした。教会は、日本式の素晴らしい建築です。天国から降りてきたかのようなでした。教会の前で六名が『テ・デウム（感謝の賛歌）』を歌い、日本の聖母、殉教者の元后、キリスト信者の助けの称号で尊ばれているマリア様に、私たちを捧げました。ドン・ボスコの聖母は、日本でもキリスト信者の扶助者の称号で尊ばれたのです。神に感謝！ 二つの意味で、故郷にきたような感じでした。

晩になって、主任司祭は信徒を集めて荘厳な聖体賛美式\*を行い、その





チマッティ神父の一番大事な宝もの

「目下、私たちには、活動するための一番必要な手段、すなわち言葉が欠けています。聖フランシスコ・ザビエルが手紙で書いたことは、私たちにも当てはまります。『この民の間で、私たちはまるで沈黙の像のようです。人々が私たちについて話し、論じたりしているのに、私たちは返す言葉がありません……。』この歳になって言葉を習得しながら、幼子に戻ったかのようにです。願わくは、子どもたちのように純真で素直になれますように。」(二月十八日)

遠くからでも神父を見つけると、寄ってきて挨拶してくれる信者たち、そして子どもたち。早速活動を始めたいという気持ちとは裏腹に、全く声が出ません。言葉の壁に悩まされます。それほど日本語は彼らにとって難しい言語でした。

長旅の疲れと、慣れない食事、環境のせいでしょうか、カヴオリ神父も熱を出し、他のメンバーも次々に不調を訴えました。まず仲間たちが健康を回復するように、そして元気になって働けるようにとチマッティ神父は奮闘します。日本の文化や習慣、宮崎の状況、日本人の特徴などの様子がこと細かく書かれた手紙が、サレジオ会総長のリナルディ神父に送られ、イタリアのサレジオ会本部が発行している「ボレッティーノ・サレジオアーノ」に掲載され、日本が世界各地のサレジオ会員に紹介されました。

さて大変困難な状況の中で、チマッティ神父が宮崎の人々、特に子どもたちと仲良くなれるようにと、いったいどんな方法を考えたのでしょうか。(つづく) (G・S)

## チマッティ資料館



なったキリストを包んだ布」研究で有名なガエタノ・コンプリ神父。サレジオ学院校長、下井草教会主任司祭を経て二〇〇〇年に資料館館長になりました。現在に至るまで、資料を細かく整理し、イタリアからもチマッティ神父に関連するものを取り寄せながら、資料館の充実に努めています。コンプリ神父自身、神学生時代に神学院でチマッティ神父と共に過ごしていますので、多くのエピソードを存じます。

資料館と地下聖堂はいつでも見学できます。案内が必要な方は電話(070-5590-0890)で問い合わせるか、資料館ホームページ…<http://www.v-cimatti.com/>をご覧ください。

武蔵野の面影が残る、東京・調布市のサレジオ神学院の中にチマッティ資料館があります。ここにはチマッティ神父直筆の手紙や写真、著書、植物や鉱物の標本・化石のほか、師が作曲した九〇〇曲ほどの楽譜が保存され、展示されています。また、毎月六日は月命日のミサが行われ、病氣など困難な状況にある方のためにチマッティ神父に神様への取り次ぎを願って祈ります。ミサ後は、参列者全員で地下聖堂に眠るチマッティ神父の墓参をします。

資料館の館長は、聖骸布(亡く



## 全世界に行って福音を宣べ伝えよ。



キリストの福音(よいしらせ)を伝えるため、フランシスコ・ザビエルが日本にやってきたのは一五四九年。その後も多くの宣教師たちが海を越え、苦難を乗り越えてその使命に生涯を捧げてきました。現在では、この日本からも色々な国に宣教師が派遣されています。今回はサレジオ家族の一員である「イエスのカリタス修道女会」の宣教活動をご紹介します。

宮崎に蒔かれた小さな種は成長し、世界へ広がった。

## イエスのカリタス修道女会



日本からボリビアへ派遣式でカウオリ神父は泣きながら四人の宣教師に語り掛けました。

アメリカ合衆国 6名

教会活動(韓国人対象)

ペルー 17名

教会活動、社会福祉・教育事業、慈善活動

ボリビア 12名

教会活動、社会福祉・教育事業、慈善活動

ブラジル 22名

教会活動、社会福祉・教育事業、慈善活動

アルゼンチン 3名

慈善活動、教会活動



ボリビアで活動するSr. 末吉

一九三七年、宮崎県宮崎市で創立された「宮崎カリタス修道女会」は、いまや世界十三カ国に広がる国際修道会となり、二〇〇九年十一月に「イエスのカリタス修道女会」(カリタス会)と改名されました。一九五六年、はじめてカリタス会が海外宣教師を派遣したのは韓国でした。カリタス会には創立初期から日本に移り住んでいた韓国出身の会員がおり、まだ戦争の傷が癒えない祖国への派遣を望んだのは彼女たちでした。窮乏の中での宣教には言い尽せない苦労がありました。その発展は目覚ましく、現在会員数が最も多い国です。

次に、創立者であるサレジオ会宣教師カウオリ神父の強い望みで、シスターたちは日本から遠く南米へ飛び立ちました。はじめて南米ボリビアに宣教師四名を派遣してから四五年経った現在、南米におけるカリタス会は、ボリビア、ブラジル、ペルー、アルゼンチンで神様の愛の種を蒔き続けています。

現在ボリビアで活動しているシスター末吉順子は、現地の状況について次のようなことを話してくれました。

「カリタス会はボリビアで、乳幼児養護施設、学校、子ども支援センターと村の診療所の手伝い、農村地帯で教会活動を中心とした宣教を行っています。

一九九〇年に任された国営の乳幼児施設的环境はその当時ひどいもので、子どもたちの着替える服も、替えてあげる十分なオムツもなく、乳児に明日飲ませるミルクを手に入れるために、毎日心配



## イエスのカリタス修道女会分布図 (2008年12月8日現在)

表示は順に国名、会員数、主な活動です



しなければなりませんでした。私の腕の中で二十人以上の乳児たちが次々と亡くなっていく、つらい体験をしました。重度の栄養失調で抵抗力がなかったことも理由の一つですが、施設の子どもだという理由で、病院で診察すらしていただけませんでした。

今も乳幼児施設の運営費の八〇％は善意の皆様のおかげでまかなっています。資金不足で施設の閉鎖を決断せざるを得ないときに、思いがけない寄付が届いて助けられ、神様が子どもたちのために働いてくださっていることを体験しました。

小さく弱い人々を特別に愛することは、カリタス会員の夢であり、使命です。私たちの宣教は、たくさんの方々の愛ある方々に支えられながら行われています。毎日自分の小ささを感じながらも、この小さな者たちを使って行われる神様の偉大なわざを賛美せずにはいられません。小さな者が行う小さな愛を、神様が今日も喜ばれると思いながら活動が続けています。」

チャマッティ神父、カヴォリ神父を含むサレジオ会第一回日本宣教師団派遣にあたって、サレジオ会総長が彼らに伝えた「人々の心に入り込むための手段は愛(カリタス)である」ということを、カヴォリ神父はことごとく自身の生き方でカリタス会員に伝えました。ことばも文化も習慣もわからない国に、信仰と従順だけを携えて飛び込んでいったシスターたちは、その教えにしたがい、今も現地の人々と苦楽をともにしながらカリタスの実践に努めています。

# 往復書簡

## 第2回

司祭となって十三年。その間、小平サレジオ学園、横浜志願院、宮崎日向学院にて司祭職を務め、現在研修休暇（サバティカル）期間中の兄、北川純二神父からの励ましの手紙に、昨年六月聖地エルサレムにて助祭叙階の恵みを受け、着実に司祭への道を歩んでいる弟、北川大介さんが応えました。

北川大介様

主の平和

あらためて助祭叙階おめでとう。

17名もの助祭が同時に誕生するなんてことは日本では考えられませんね。いや、日本に限らず世界中でもそんなことだと思います。

叙階から早くも半年が経ちましたが、これからの約1年間、助祭としての職務を心を込めて果たしてください。助祭職は本来的には固有のものですが、司祭を志す者にとっては、司祭職への準備期間でもあります。助祭固有の奉仕職を誠実に、そして熱心に務めることが、そのまま司祭職へのよい準備になるはずです。

今年はちょうどヨハネ・マリア・ヴィアンネ神父の帰天150周年で「司祭の年」です。この記念すべき年に司祭職への準備ができることに感謝しないといけませんね。そこでヴィアンネ神父の祈りをひとつ紹介します。彼がフランスのアルスに赴任したときの祈りです。

「（主よ）わたしの小教区の人々の回心を受け入れてください。わたしは生涯、あなたが望まれるならどんなことでも苦しむ用意があります」

この言葉を読んで、マンマ・マルゲリータが新司祭のドン・ボスコに言った言葉を思い出しました。

「司祭になることは、苦しみ始めることなのだよ……」

もし、司祭の苦ishみが神様の望みであるのなら、それは司祭にとってむしろアドバンテージではないかと思います。神様が司祭に望まれる苦しみは、人としての弱さを強調するためではなくて、神様の恵みの多さ、そのすばらしさを現すためなのかもしれませんね。神様は司祭の苦しみや弱さを通して、ご自身を現されるのだと思います。このことは司祭のすごく大切な役割であるはずだす。

話は変わりますが、あなたとは13歳離れていて、しかも私は早くから実家にいなかったこともあって、一緒に生活したのはあなたが赤ちゃんだった1年半だけでした。こんな言い方はおかしいかもしれないけど、弟ということを実感し始めたのは、あなたが初誓願を立ててからでしたね。それまでは志願生のあなたと時々会うことはあっても、正直兄弟としてはどうもピンとくるものがなかったのが事実です。

もちろん、兄弟であるということは最初から何も変わらないことです。ところが、同じサレジオ会員としていろいろなことを共有するようになってから、あなたに対する感覚がずいぶんと変化してきました。この変化は自分でもちょっと不思議でしたね。何と表現していいのかわかりませんが、サレジオ会員として兄弟であるということは、ある意味、血のつながりをも超えるとも言っていいかもしれません。ちょっと言い過ぎかな……。

最後に、サレジオ会創立150年の慶ばしい年に、司祭・修道者として生涯を捧げつくすことができるようにドン・ボスコの特別な取次ぎを願いつつ……。

北川純二 神父



助祭とは、教会の職務で、司祭になる前の段階をいいますが、助祭職それ自体が教会のなかで司祭職とは異なる固有の役務を持っています。キリストが人々に奉仕したことに倣って、半年以上任務である愛の奉仕を実践します。司祭に叙階はされず、既婚者もなりうる終身助祭制もあります。



北川純二神父様

主の恵みと平和

手紙ありがとうございます。

他人事のような言い方ですが、17人の助祭が同時に生まれる光景はさすがに迫力がありました。それに加え、叙階されたグループの国際色、聖地エルサレム、聖母の生誕の地、といった様々な要素が叙階式をさらに豊かにしてくれました。しかしながら、感謝すべきは神様の寛大な恵み、そして多くの人の祈りです。叙階式は、いかに多くの人の祈りによって私の歩みが支えられているかということを改めて知るまたとない機会でした。考えてみれば、その生涯を通じて司祭ほど多くの人々から祈ってもらう人は他にいません。そうであれば逆に、司祭ほど祈る人は他にいない、と言われるようになりたいものです。

教皇様が宣言された司祭年に、司祭叙階への最後の準備ができるというのは何ともありがたい巡り合わせです。主のために苦しむ、という聖ヴィアンネとマンマ・マルゲリータの言葉、すでに司祭として10年以上生きてきた純兄ちゃん(やはりこう呼ばせてください)から言われるとやはり重みがあります。

さて、弟という実感がなかったということですが、こちらからも言わせてもらえば、それはお互いさまです。僕にとっても兄という実感はあまりなく、「純兄ちゃん」＝「たまに家に帰ってきて遊んでくれる神学生の子」と定義されていて、毎年の帰省が楽しみでした。神学生の純兄ちゃんに憧れがあったのは事実ですが、サレジオ会の志願院に入った一番の理由は野尻湖聖書学校に魅せられたからです。志願院に行った後に「兄もサレジオ」だということを理解しました。同じカリスマに惹かれるのはやはり血のつながりですか。

小さい頃から兄たちと姉の言うことには素直に耳を傾け、その行動を真似ようとしてみたりしました(本当です)。歳が離れていたからでしょう、兄姉には妙に大人びた雰囲気を感じ、「オールマイティ」兄ちゃん・姉ちゃんという印象が小さい頃は常にありました。お父さんの車で勝手にドライブに出かけて車の後部をぶつけたのを覚えていますか。夕食のとき、お父さんに謝る純兄ちゃんの姿を見て、「ぼくと同じだ。やっぱり兄弟だな」と安心したものです。オールマイティであることよりも、弱さを共有できることに家族・兄弟の良さがあるんだと、知らず知らずに学んでいました。

修道会において兄弟会員というのは決して珍しいものではありませんね。様々な兄弟がいて実に多種多様です。僕たちの場合、手に手を取り合って、とか、肩を組んでともに歩むとかいう間柄の兄弟ではありません。それでも「あら、やっぱり北川さんね」と言われるような味を2人で醸し出しながら、イエス・キリストが示してくださった道を共に忠実に辿ることができればと思います。

北川大介







「おい、そこのおやじー」そう言いながら突然、私に向かって走り寄ってくる中二の男の子。「田村にい、遊ぼうや」と言われ、「今やらなければいけない仕事があるから、あと十五分してからにして」と私が答えると「意味分からんし、きめえー」と言う小五の男の子。「サートイーワンのアイス、いつおごってくれる?」と毎日のように声をかけてくる高一の女の子。こうした子どもたちに囲まれながら私は毎日を過ごしています。

大分県と福岡県の県境に位置する山国川や八面山など雄大な自然に恵まれた環境の中に児童養護施設「聖ヨゼフ寮」があります。児童養護施設とは児童福祉法に定められた児童福祉施設で、予期できない災害や事故、親の離婚や病気、また不適切な養育を受けているなど様々な事情により、家庭で生活することが難しい二歳から十八歳までの子どもたちが暮らしています。戦前や戦後まもなくは、いわゆる「孤児院」と言われ戦争や病気などで親を亡くした身寄

## サレジオ家族訪問 ともに育つ家 聖ヨゼフ寮 (大分・中津)

Fr. 田村 寛

りのない子どもたちが生活する場として児童養護施設は存在していました。しかし、近年は「不適切な養育」なかでも暴力や暴言を受ける、お腹がすいてビービー泣いていても食べ物をもらえない、おしめが濡れて気持ち悪がつて泣いていても長時間そのまま放置されるなどの種々の虐待から保護される形で施設に入ってくる子どもたちがどんどん増えていきます。

聖ヨゼフ寮は中津城に隣接する三の丁の教会に三名のサレジオ会員が

定住したことに始まります。

一九三三年にそれまで小神学校として使われていた建物を利用して開設し、中津養成院という名で孤児を中心で養育していました。戦後は一九四六年に現在地(永添)に移転し、学校教育(ドン・ボスコ学園)と社会福祉(聖ヨゼフ寮)の拠点として青少年の健全育成に貢献してきました。

現在、学校教育は地域の公立学校に委ねて「児童養護施設聖ヨゼフ寮」として先に挙げた様々な事情で家庭





での養育が困難な三五名の子どもたちが男女別三つの家で協調性や思いやりの心を育みながら生活しています。また、併設事業として学童保育「永添児童クラブまりあ」があり、四五名の地域の子どもたちを受け入れています。

幼い時に一番大事なことは、人としてしっかり結びつくこと(愛着)であり、そうすることで子どもは人に対する信頼感を獲得していきます。しかし、その時期に不適切な養育を受けるとその後の対人関係には様々な問題が生じてくるのです。先にふれた「おしめが濡れて気持ち悪がって



泣いても放置されたまま」というのは、いわゆる自分の不快な感情や感覚を大人が受け止めて自分を元のいい状態に戻してくれるという経験がないということ。その結果どうなるかと言うと、自分で自分の不快感や不快な感情を扱う能力が育まれない、逆に無気力になったりしてしまうのです。

「子どもたちを愛するだけでは足りません。子どもたちが『自分は愛されている』と感じることができるよう、子どもたちを愛さなければなりません。」これはサレジオ会の創立者ドン・ボスコの言葉で、ヨゼフ寮の養育理念の柱です。ヨゼフに來る前に不適切な養育を受けて自分は愛される価値のない存在だと思っている子どもたちにとって、「自分が大事にされた」という思いをもつことはとても重要なことです。そうは言っても実際にこのことを生活の中で行っていくのは簡単なことではありません。日常生活の中で子どもたちの抱える悩みや痛みを「解決する」など到底不可能で、せいぜい「一緒に考え、悩む」ことぐらいでしょう。

しかし一緒に考えたり、悩んだりすることこそ、子どもたちが私たちに求めていることだと思っています。

また、ここで生活する子どもにとってもう一つの大事なテーマに「自立」があります。ヨゼフ寮は子どもたちが安心して生活する場であると同時に、卒園後は社会の荒波に揉まれながらも生きていける力を身につける場でもあります。基本的な生活習慣の確立に加えて学力・体力やコミュニケーション力、施設のルールを守ることににより社会の規範を守る練習をするなどたくさん課題に日々子どもたちは向き合っています。

聖ヨゼフ寮は一昨年十二月に創立七五周年を迎えました。七五年という年月の中で多くの子どもたちがここを巣立っていったのですが、不思議とヨゼフで生活している間に大人が手を焼いた子どものほうが結婚や子どもの誕生、転職、失業など折にふれて様々な喜びと悩みを分かち合うために顔を出してくれます。そして彼らの人生に立ち会う場を与えられて、関わる私たちも育てられていますと実感しています。これからも神様から委ねられた子ども一人ひとり



#### 児童養護施設 聖ヨゼフ寮

大分県中津市大字永添 2646-4

創立: 1933年12月

児童数: 35名(2009年度)

職員数: 22名(2009年度)

同敷地内に学童保育「永添児童クラブまりあ」を併設

を大切にしながら「ともに」成長していけたらと思っています。

# 夜回りと マリアのメダイの 大切な関係

Fr. 雨宮 泰紀

私は昨年から、週日の夜二回、近所の夜回りをしている。夜中鳴り響くバイクの爆音を耳にして、「どんな子たちが走っているのだろう。彼らと会って話ができたらな。」と思い、ささやかな「夜回り」を始めた。さすがに初めてバイク少年たちに出会った時は緊張し、思わず十字を切ってから声をかけてしまったが、彼らともかなり話せるようになった。そして、初めは一人だった「夜回り」が、現在私を含めて八名のチームになった。

「夜回り」という言葉から刺激的なことをたくさん想像されるかもしれないが、実際はそうでもない。基本的にゴミ拾いをしながら、公園などで出会う様々な人々と話をするのである。しかもいつも誰かと会えるとは限らず、ゴミ拾いのみで終わってしまうこともある。ただ私などは、特に若者たちの誰とも出会えない夜は、「なんだ、つまらん」と内心思ってしまうのである（多分他のメンバーも同じ…）。あきれた「夜回り」である。

ある時、寒い夜によくたむろしている、公園の多目的トイレの電気がついていたら、「今日はいるな…」二人、タバコを吸っていた。

「おお、久しぶり。どうよ、最近？」

「まあ、ぼちぼちね。学校行って、仕事してるよ」「マジで？ そりゃハードだね」

「とりあえず出れば単位くれる学校だからよ」「それでも毎日は大変だろ？」

「ま、仕事は毎日じゃないし」

「そうそう、どうよ、足の方は？」（彼はバイクで事故って大怪我をしてしまった）

「前よりはよくなってるけど…」

「まだまだ先長いんだから、ちゃんと病院行きなよ」

「マジ面倒なんだけど、病院」

「若いんだから、足、大事にしるよ」

「……………」

「そうだ、お守りみたいなもんだけど、このメダイあげるよ、聖母マリアの」

「マジで!? ありがとう！ 銀？ プラチナ？」

「サレジオで銀は無理。プラチナはあり得ない。これ、高くないけど一応イタリア製。ちゃんと祝福してあるし」

「おお、どうも」

「じゃ、一回りするわ。またね」

「お疲れさんです」

メダイを喜んでくれるヤンチャ君たちもいるのである。

実は、マリアのメダイを配るまで一年かかった。私は週末の夜は新宿や渋谷に行っているが、そこで出会ったある女の子の抱えている底知れない闇の前に、どうにもならない自分を見出した。

このことをマザーテレサの修道会のシスターに話すと、こう即答された。「どうしてマリアさまを連れて行かない？ 子どもたちにメダイをあげて。」大切なことは、実にシンプルだった。

私たちの「夜回り」チームの特徴、それは信仰を前提としていることである。始めに祈り、夜回りに出る。帰ってきたら、全員がその日のことを分かち合い、祈りで締めくくる。特に出会った若者を思い起こして祈ることが多い。そして私たちの実感は、私たちが若者たちに何をしたか以上に、彼らを通して、神が私たちを変えてくださったということである。結局私たちは、神の手の中で「夜回り」をし、彼らと出会っているのかもしれない。

ちなみに、私たちの「夜回り」チームにはまだ名前がない。これからメンバーで考えようと思っている。







【イラスト：ヨーヘイ】

## みことばマジック

「自分の命を愛する人はそれを失い、  
この世で命を惜しまぬ人は、それを  
保つだろう。」(ヨハネ福音書 12章 25節)

去年の8月に、ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ(DBVG)として、男女15名の大学生と1人のサプリーダーの神学生と一緒に、ソロモン諸島に派遣され、ボランティア活動を行なって来ました。主にテテレという所にある技術訓練校のフェンス設置作業の手伝いをして3週間を過ごしたわけですが、派遣中の8月15日「聖母被昇天の祭日」の前夜、現地の教会の青年たちのために「祈りの集い」が行なわれ、それに私たちも参加させて頂きました。その時、ある神父から1つの質問が若者たちに投げかけられました。「Are you happy? (あなたは幸せですか)」思わず考え込む青年たちに、さらに「幸せを求める生き方」について考えるヒントが与えられました。ここで皆さんにもそのヒントを分かち合いましょう。

『人々が常に求め、味わえる「幸せ」といってもいろいろなレベルの幸せがあります。それは、あるひと時の幸せだったり、幸せな1日や幸せな1年があったりもします。さらに私たちは永遠の幸せ(Happiness Forever)も求めることも出来ます。それはこの世の幸せだけではなく、天国の幸せをも含むものです。天国での幸せも味わえるために、今をどう生きるのか考えてみてください』というものでした。皆さんはどう考えるでしょうか？

人は誰も幸せを求めて生きているのですが、その求めている幸せについて改めて考えると、よくわからなくなります。深く考えれば考えるほどに……。

おいしい物を食べ、ゆっくりとお風呂に浸かって、ぐっすりと眠れるなら、それはそれで単純だけれども

本当に幸せなことだと思います。でも、それが当たり前前のことのようにあると、その幸せに気づかなくなってしまいます。病気になって、当たり前のように健康でいたことの幸せに気づいたりもします。また、健康であれば幸せかという、そうとも限らないし、体が健康でなくても人は幸せを見出すことが出来るわけです。そんなことを考えると、「幸せ」とは何をもって幸せだということのかわからなくなるわけです。

実に「幸せ」は、トリッキーで不思議なものです。何がどうトリッキーで不思議なのかというと、「幸せ」は求めると、かえって手に入らないということです。自分は幸せになりたいと、自分の幸せを求め、幸せになるように努力しているうちは決してならず、むしろ自分自身ではなく人を幸せにした時に、そこに幸せな自分を見出すことになるわけです。自分の、幸せになろうという思いを手放し、人の幸せを求める時に、自分の許にその幸せが訪れるのです。

こんな不思議な「幸せ」のトリックが少しわかったところで、冒頭のイエス様のみ言葉を味わうと、神様からのメッセージが理解しやすくなったのではないのでしょうか？自分のために生きようとすればその命は生かされず、自分に与えられた命を捧げてこそ、真に生きようになるのです。そして、自分を神様や家族、周りの人に捧げて生きるその生き方が「永遠の幸せ」を味わえるものとなるのでしょうか。

Fr. Mickey MURAMATSU(村松 泰隆)

## サレジオ会 創立二五〇周年記念ミサ



一八五九年十二月十八日午後九時、ドン・ボスコの部屋には一八人の若者が揃い、危険にさらされた青少年のために修道会を形成することを決めました。その時から一五〇年経った二〇〇九年十二月十八日、全世界の各地で、日本管区では東京、横浜、大阪、別府、宮崎の五か所でミサが行われ、三つの修道誓願（清貧、貞潔、従順）を更新しました。

チャーベス総長は、ミサの前に上映されたビデオメッセージの中で「創立一五〇周年が、創立初期の生き生きとした活力を取り戻し、教会と現代社会にそのパッションを忠実に伝えるための機会となりますように。勇気をもってドン・ボスコの夢を追いましょ。う。」と呼びかけました。

## サレジアン・シスターズ 「喜びの集い」開催

昨年十一月十五日（日）、サレジアン・シスターズ赤羽修学院で、「喜びの集い」が行なわれました。参加者は、東京近辺の小学校四年生から六年生の二八名の元氣な子どもたちです。パワーポイントやオリエンタリングで、楽しくみことば（聖書の中にあるキリストのメッセージ）を学び、初めて参加した四年生もすぐにうち解け、笑顔の絶えない一日でした。みことばの小さな種がこの子どもたちの心に深く根付き、大きく豊かな実を結びますように！

この集いは毎年十一月初旬の日曜日に行われます。お問い合わせは赤羽修学院（03-3906-0170）まで。



## イエスのカリタス修道女会 初誓願式、終生誓願式行われる

昨年の十二月八日、イエスのカリタス修道女会で誓願式が行われました。

初誓願立願者二名

シスターマリア・クルス大山美樹

（長崎県出身）

シスターマリア・スベランツァ谷口真理枝

（長崎県出身）

終生誓願立願者三名

シスターベルナデッタ辻智美（長崎県出身）

シスターテレサ・マルティン谷口美英子

（長崎県出身）

シスターアニージーナ上田千穂

（福岡県出身）

誓願とは、神と教会に仕えるために貞潔、清貧、従順を誓う（修道誓願）こと。

終生誓願とは、修道者として生涯にわたって、すべてを神に捧げることを誓うこと。



左からSr.谷口（美）、Sr.辻、Sr.上田、Sr.大山、Sr.谷口（真）

## サレジオ会 日韓の若手司祭の交流会 開催

昨年末、韓国から十人、日本からは十一人の若手司祭が東京に集い、研修と見学、交流の有意義な四日間を過ごしました。「司祭としてのアイデンティティをいかに作っていくか」をテーマとする研修では、コディネーターFr.酒井の講話の中で「人間の成長の中で神や人として自分への信頼を獲得することの大切さ」が強調され、参加司祭の間で意見交換が行われました。

その後、小平サレジオ学園を見学し、施設長のFr.野口による児童養護事業の現状の説明に、韓国の司祭から積極的に鋭い質問が投げかけられました。

三河島教会訪問の際には、在日韓国人信徒が首を長くして若手の韓国司祭を待ち構えており、韓国語のミサ後の歓迎パーティーで、信徒の方が涙を流して喜びの挨拶をし、祖国を離れた人々がいかに自国の言葉での交流、特に霊的な交流を待ち望んでいるかということ垣間見ることができました。

期間中は、日韓対抗サッカーや会食談を通じて若手同士の交流が深められました。また、イエスのカリタス修道女会のSr.前田が通訳を引き受け、交流を支えてくださいました。二年後は韓国で行われますが、そのころに、お互いがどのように成長しているか、今から楽しみにしています。

Fr.中田正一郎



## 「宮崎カリタス修道女会」から「イエスのカリタス修道女会」へ

【別府】宮崎カリタス修道女会は、2009年10月に、別府市にある亀川黙想の家で第13回総会を開催しました。その中で、会のカリスマを適切に表す修道会の名称を検討し、2009年11月4日付でローマ聖座の認可を受け、「イエスのカリタス修道女会」(Suore della Carità di Gesù)と改めました。

総会は、修道会発祥の地である宮崎市の、カリタスの園聖堂で行われたミサで開会し、11月7日に亀川黙想の家の聖堂でサレジオ会副総長アドリアノ・ブレゴリン神父が主司式を務めたミサで締めくくられました。

1カ月に及ぶ今回の総会には、サレジオ会日本管区及び韓国管区の神父、サレジアン・シスターズ韓国管区シスターも参加し、サレジオ家族の愛に見守られ、支えられた会となりました。



### from Readers

本誌へのご意見、ご感想、ご要望をお寄せください。

ドン・ボスコの教育理念は現代の日本でも立派に通用します。貴誌の存在が、日本の文化を包容する力となるよう、心から願っております。(静岡市・H.M.さん)

この冊子の記事は読者の一人である私自身に一つ一つ語りかけてくれるような感じがいたします。(杉並区・S.F.さん)

宮崎カリタスのシスターより送って頂き、拝見しました。企画、内容共にすばらしく読ませていただきました。(千葉市・K.M.さん)

ドン・ボスコの教育法が、どのように実際に教育の現場で活かされているか、とても興味深く拝見しました。(練馬区・H.S.さん)

この冊子は、私にとって身近なニュースに満ちていて、とても楽しみです。(N.K.さん)

チマッティ神父様のシリーズを楽しみにしています。伝記にはない逸話も是非紹介してください。(調布市・J.G.さん)

聖ヨハネ・ボスコが創刊した“Bollettino Salesiano”の日本版「ドン・ボスコの風」は、創刊者の方針により無料でお届けすることになっております。この雑誌の趣旨にご賛同くださる方のご寄付は、発行継続のための大きな力となります。是非下記へお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

郵便振替 口座番号 00100-7-412947 加入者名 「ドン・ボスコの風」編集事務局

お振込の際に、添付の払込取扱票をご利用くだされば、手数料はかかりません。

ご寄付をお送りくださる皆様に、心より感謝申し上げます。

### ドン・ボスコの風 No.4

BOLLETTINO SALESIANO

2010年1月24日発行

編集人 関谷 義樹

発行人 アルド・チブリアニ

発行所 サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ会管区長館

電話：03-3353-8355 Fax：03-3353-7190

Eメール：DB-no-kaze@fiberbit.net

郵便振替 00100-7-412947 「ドン・ボスコの風」編集事務局

アートディレクター 後藤 宏幸

印刷所 三英グラフィック・アーツ(株)

### from the Editor

編集後記

「現代の若者ほど寂しさを内に秘めている世代はなく、彼らは信頼できる人々の存在を求めています」というブレゴリン副総長の言葉にはっとさせられた。私たちは日本の若者の寂しさを本当に理解しているのだろうか。「ドン・ボスコの風」の「風」は、寂しさの対極にある喜びの風でありたい。真の喜びは深い「かわり」から来る。わたしたちが若者と深くかわることによって、この日本の社会に喜びの風をもたらし使徒となっていけるように。(S)



# 「わたしたちは、イエスに会いたいのです。」

(ヨハネ 12:22)

"Sir, we want to see Jesus"

(John 12:22)

In imitation of Don Rua,

As authentic disciples and zealous apostles

let us bring the Gospel to the young.

若者に福音を伝えよう  
ドン・ルアにならい  
本物の弟子、  
情熱あふれる使徒となって。

ドン・ボスコとドン・ボスコの精神に、全面的に忠実であったサレジオ会の第二代総長、ドン・ミケーレ・ルアの帰天100周年に当たり、全サレジオ家族に呼びかけたいと思います。

イエスへの愛に燃える弟子、熱意あふれるイエスの使徒となり、若者に福音(神様の良い知らせ)を告げ知らせましょう。若者に福音を告げることは、主イエスとの出会いへ若者を導くことです。

彼らがイエスの永続的な魅力を発見できるように。私たちがキリストとどのように出会ったかを、若者に語りましょう。

キリストを知り、キリストを知らせること以上に素晴らしいことはありません。(チャーベス総長によるストレンナ2010解説より要約)